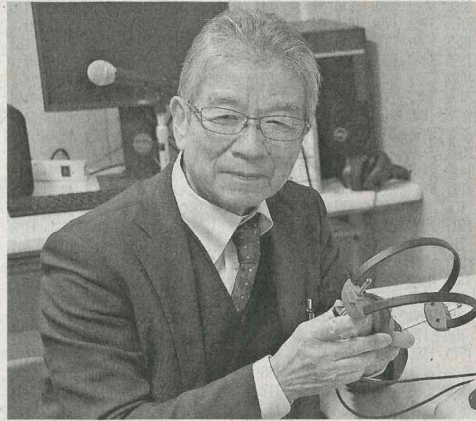


医療功労賞に2氏

地域医療に長年貢献した人に贈られる「第52回医療功労賞」で、東北地方医療功労賞(読売新聞社主催、福島民友新聞社共催、厚生労働本省、東北厚生局、日本テレビ放送網、ミヤギテレビ後援、JCR、ファーマ協賛)の表彰者が決まった。県内からは郡山市の言語聴覚士、長谷川賢一さん(75)と、いわき市の助産師、門馬美那子さん(67)が選ばれた。2人の歩みや抱負を紹介する。



「多くの助言が今につながっています」と話す長谷川さん(郡山市で)

言葉の障害回復支援

言語聴覚士として50年以上、脳卒中患者や障害者らの言葉や食事面でのリハビリに携わってきた。受賞を

「取り組みが間違っていないかった」と喜ぶ。大学4年の夏、知人を通じて県内有数の大規模なり

ハビリセンターを持つ太田熱海病院(郡山市)を見学した。多くの専門職が患者の社会復帰のために働き、当時は珍しかった言葉の障害からの回復に力を入れていることに興味を持った。

国立唯一の養成校で言語療法を学び、1972年から太田熱海病院で働き始めた。患者が何に困っているのかを常に丁寧に聞くようにした。退院した患者が回復した様子を見ると苦勞が吹き飛んだ。

座右の銘は「言葉は生きる力」。手先の器用さを生かし、難病患者がコミュニケーションを取れる電子機器なども独自に開発した。

だが、言語療法の専門職は長年資格化されず、社会の認知度も低かった。80年代から仲間と共に資格制定に向けて国会議員らに働きかけを始めた。言語聴覚士が97年に国家資格として制定されると、初の地方組

織となる福島県言語聴覚士会を設立。会長に就任し、勉強会を定期的に開いた。

「多くの言語聴覚士を育

助産師 門馬美那子さん 67



人形を使って小中高校で命の講話をしている門馬さん(いわき市で)

45年母子に寄り添う

約45年にわたり、助産師として数多くの赤ちゃんを取り上げてきた。県助産師会いわき会の会長を2007年から務めており、母子

に寄り添う活動も精力的に展開している。受賞には光栄なこと。さらに母子支援を頑張りたい」と笑顔を見せる。

田村市常葉町出身。県立総合衛生学院を卒業後、1

てることが社会のためになる」との思いで、徐々に教育に比重を置くようになった。今も国際医療看護福祉大学校(郡山市)で毎週1

経験した。泣いてばかりはいられず、3月末まで病院に泊まり込み、他の診療科の患者対応にあたった。13年以降は、ノブマタニティークリニック(いわき市)で、分娩の介助をしている。いわき会の活動として、1998年に授乳相談事業を始めた。今では広野町でも妊婦らを対象にしたサロンなどを実施している。

979年から2013年まで、いわき市立総合警城共立病院(現・いわき市医療センター)で勤務した。助産師になったのは、「おめでとう」と言える仕事をしたいからだ。しかし、11年の東日本大震災では、経過を見守っていた妊婦が、おなかの赤ちゃんとお上の子供2人と共に津波で流され、つらい別れを

多岐にわたる助産師の仕事にやりがいを感じる。一方で、地域の母親の声を聞くこと、「社会で子育てを支援する体制になっていない」と痛感する。「2、3年したら相談に乗る活動に軸足を移し、まだまだ頑張りたい」と意気込む。

他の人も大切にしたい」と呼びかけている。